

令和 2 年 7 月 13 日現在

機関番号：16101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04551

研究課題名(和文) 認知症疑いの高齢者に対する教育学的観点からの生涯学習の利活用に関する国際比較研究

研究課題名(英文) An Educational Perspective on Lifelong Learning Programs for Individuals with Dementia: A Comparative Study

研究代表者

鈴木 尚子 (SUZUKI, Naoko)

徳島大学・人と地域共創センター・准教授

研究者番号：00452657

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果として、高齢化の進行する国々の先進的な図書館・博物館・美術館等では、認知症疑いの高齢者や認知症高齢者を主たる対象として、施設の特性や地域資源を活かした教育事業が行われていること、認知症が重症化した高齢者に対しても、アウトリーチ事業として生涯学習関連施設の職員やボランティアが介護施設に出向いたり、当事者が快適に過ごす包括的環境が整備されたりする中で、多様な学習支援が提供されていること、職員には対応力向上のための研修が実施されていること、以上の学習機会を通じ、認知症当事者に、社交性の向上、人間性の発揮、地域への帰属の実現等の肯定的変容がみられることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義として、認知症疑いの高齢者や認知症高齢者について、様々な分野の学問的蓄積を踏まえた上で正しく理解並びに対応できれば、教育学の立場からも彼らをめぐる諸問題に対して学問的に貢献しうる可能性を示唆したことが挙げられる。また、本研究の社会的意義として、認知症に係る膨大な社会的コストに鑑み、医療・介護分野だけでなく、地域社会全体の関係性の中で認知症をとらえ、それにまつわる諸問題を解決していくための一つの手段として、生涯学習に関係した地域の物的・人的資源の効果的利活用を提起したことが挙げられる。

研究成果の概要(英文)：The outcome of this study can be summarized as follows. In Japan and other countries experiencing population aging, some public libraries and museums have developed innovative programs for those potentially exhibiting noticeable memory impairment and/or living with early-onset dementia, taking advantage of unique institutional features and rich local resources. For those experiencing middle- and late-onset dementia, some outreach programs are offered by staff and volunteers of educational institutions who are prepared to bring their own resources to nursing homes. In some instances, training programs are offered to employees of such institutions to improve their knowledge and skills in working with persons with dementia. Positive transformations have been observed among those living with dementia as a consequence of the opportunities for lifelong learning. These include increasing social interaction with others, demonstrating "personhood," and realizing a sense of community belonging.

研究分野：教育学(生涯学習・社会教育)

キーワード：認知症 高齢者 生涯学習 教育学 学習支援

## 1. 研究開始当初の背景

未曾有の超高齢社会が進行する我が国では、2025年には700万人に達すると予測される認知症高齢者への対応は焦眉の課題である。認知症をめぐっては、今日当事者が立ち寄る地域の様々な場所でトラブルが生じる傾向にあるが、生涯学習関連施設も例外ではない。例えば、我が国の大学内に設置された生涯学習系センターの提供する公開講座には、多くの高齢者が通っているが、その中には認知症が疑われる症状が見受けられたり、認知症と診断されたと申告したりする者も散見される。典型的な症状としては、頻繁に講座の日時を誤る、継続的に記憶を担保できず、同じ行為（尋ねる、話す、書く）を繰り返す、抽象的思考や他者との発展的議論ができない等が含まれる。これらに関して、対応する側に十分な知識や経験がない場合、当事者の症状を悪化させる危険性もある。しかし、たとえ認知症を発症したとしても、自分にとって有益な未知の情報を獲得したいといった知的欲求は、身体・精神症状の如何に関わらず誰にでも生じうる。したがって、当事者が軽度や初期の段階であれば、地域の生涯学習に関連した施設で正しく彼らを受け止め、適切な対応をすることは、彼らの精神性を維持し、周辺症状を軽減させる可能性があるだけでなく、進行を緩やかにする上でも有意義なものとなろう。ここで問題となるのは、地域の各種施設において、いかに彼らの学習を支援し、その効果を見出せるのかという点である。

我が国の現状においては、認知症高齢者への学習支援について、医療・介護関係者による非薬物療法として、治療の観点からの研究並びに実践は多く行われてきた。また近年は、一般市民向けの地域における諸活動の中に、認知症サポーター養成、認知症の医学的な概説、予防目的の適度な運動等が含まれる他、一部地域に“認知症にやさしい”図書館に向けた取組等がみられる。しかしながら、我が国の全般的傾向として、認知症当事者に対して直接働きかける学習活動を、医療・介護関係者以外が主体となり、地域の生涯学習関連施設や一般市民等の物的・人的資源を活かしつつ、効果的に整備していくという視点は十分ではない。また、教育学分野での認知症高齢者に特化した学習支援に関する研究は、本研究遂行時点で国内にはほとんど存在していない。

一方、高齢化の進行する諸外国では、認知症にまつわる諸問題が、医療や介護分野に限らず地域全体で解決すべき課題として位置づけられ、(教育学も含めた)人文・社会科学を含むあらゆる分野の関係者を巻き込んだ総合的な国家戦略のもと、当事者の学習支援についても取り組まれる傾向にある。こうした中、地域社会で生涯学習に関連した諸施設の特性を活かした様々な効果的实践並びに実証研究が近年一部地域にみられており、認知症当事者の著しい肯定的変容が報告されている。したがって、国内外の現状を踏まえ、認知所高齢者への生涯学習の機会を活かした学習支援として実績のある諸外国の先進的な実践事例や研究蓄積に学びながら、教育学の見地より学術的のどのような貢献が可能かを明らかにしたいと考え、本研究課題の着想に至った。

## 2. 研究の目的

本研究は、教育学の観点から、認知症疑いもしくは認知症の高齢者に対する生涯にわたる学習機会の利活用に焦点を当て、諸外国の優れた先進的事例を取り上げ、その内容・形態と認知症当事者の変容、当該事業に携わる職員等への研修のあり方を現地調査によって析出し、その結果を複数国間で比較することを通じ、生涯学習関連施設等の特性を活かしながらいかに当事者の学習を支援できるのか、またそれによりいかなる効果を見出せるのかを解明することを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究では、資料分析調査の他、参与観察調査と聴き取り調査を用いて次の手順で進めた。

まず、資料分析調査は、主に先行研究の動向を把握するため、初年度を中心に実施した。具体的には、主に教育学の観点から認知症高齢者への学習支援に関して先進的な実践のみられる事例を含め、関連する文献を収集・精読し、その傾向を整理・分析した。

その後、初年度に行った資料分析調査を通じて明らかにした諸外国の先進的事例をもとに、2017年度から2019年度にかけては、具体的な調査地及び調査対象施設を選定し、了承を得た各施設において、参与観察調査並びに聴き取り調査を用いて現地調査を遂行した。調査対象となる生涯学習に関連した施設として、認知症高齢者へのプログラムが実施されている博物館（デンマーク、スウェーデン）、美術館（米国）、図書館（米国）の他、管理された屋内外の敷地内で認知症高齢者の主体性を活かしたケアが行われている“認知症村”（オランダ、カナダ）や、“認知症にやさしい”まちづくりの一翼を担う成人教育施設（英国）を取り上げた。

各施設においては、対象となる認知症高齢者を対象としたプログラムが滞在中に行われる場合には、オブザーバーもしくは支援者の一人として参加しながら参与観察調査を実施し、対象となる認知症高齢者・介護者及び事業担当者（施設職員及びボランティア）の変容を記録した。同時に、事業開発者・事業担当者・その他関係者に対して聴き取り調査を実施し、可能な場合にはプログラムに参加する認知症高齢者や介護者からも食事や会話を通じて交流する際に意見を聴取した。各施設では、認知症高齢者に対するプログラムの内容・形態、それによる認知症高齢者の変容、職員研修のあり方を中心に、許可された状況に応じて調査を遂行した。

以上の諸外国での調査と併行して、図書館と博物館に関しては、我が国でも部分的に関連した先進的な事例が存在するため、諸外国での現地調査遂行前後に国内の取組施設（愛知県北名古屋市及び神奈川川崎市）を訪問の上、事業内容に関する意見を聴取し、比較考察の参考とした。

#### 4. 研究成果

##### (1) 先行研究の概況

認知症高齢者への学習支援を直接的もしくは間接的に扱った文献を、教育現場における臨床上的実践事例を扱った研究、認知症と教育上の諸概念（特に生涯学習、学歴等）との関係性から論じた研究、幅広い視野から認知症をとらえ直した研究に大別して考察し、次のような結果を得た。

第1に、教育における臨床上的実践事例を扱った研究としては、大学が運営する生涯学習関連施設、図書館、博物館等における固有の資源を活かし、認知症高齢者に直接働きかける教育事業を実施した上で、当事者の変容を質的・量的に分析したものが米国やスペイン等に存在する。こうした事例に含まれる対象者は、概ね認知症初期までのことが多い。また、事業担当者の中には一般市民が含まれる場合も少なくなく、その際教員経験のある健常な高齢者を指導に活かす事例もある。さらに、大学や生涯学習関連施設全体が“認知症にやさしい”施設となるよう取り組む事例もみられる。これらの取組の目的には、多くの場合、当事者への学習支援だけでなく、介護者の不安の軽減や一般市民への意識啓発が含まれる。第2に、認知症と教育上の諸概念との関係性を扱った研究としては、認知症と生涯にわたる学習の関係性、認知症発症者の学歴と幼少期の知能との関係性、認知症発症と日常生活習慣との関係性、認知症の発症と当事者の学歴との関係性、生涯学習関連施設の提供する学習機会への参加と認知機能への肯定的かつ持続的なインパクトの関係性等についての論究がある。第3に、幅広い視野から認知症をとらえ直した研究として、ドイツやカナダの高齢者問題を扱う研究機関では、多様な専門分野の関係者による学問的蓄積を融合した総合的な認知症研究が存在し、その中に教育学が含まれる場合もあることが判明した。

##### (2) 現地調査において取り上げた先進的事例

###### ① 博物館等の事例

博物館は、歴史的に貴重な資料を収集・保管するとともに、来館者に作品を展示・体験させる他、そのための調査・研究を行うという機能を有しており、来館者の感性によって自由に受け止めることが可能となる多様な作品を収蔵していることにその特徴の一端がある。こうした利点を活かした認知症高齢者への教育事業として、現地調査では北欧及び米国の事例を取り上げた。

###### a. 北欧の野外博物館における事例

今日、北欧における野外博物館の多くでは、中世から今日に至る人々の暮らしが扱われており、想定された時代に合わせて各建物や周囲の風景が再現されるとともに、多くの場合、それぞれの時代の衣装を身につけた職員により、疑似的な日常に来館者を誘い込むといった演出が加えられている。認知症高齢者を主たる対象としたプログラムもこうした特性を活かして実施されている。

現地調査では、デンマーク・オーフスにある都市部の生活を再現した（“民衆の博物館”を意味する）Den Gamle Byと呼ばれる1909年に創設された野外博物館と、スウェーデン・エステルスンにある農村部の生活を再現したJämtliと呼ばれる1914年に創設された野外博物館を取り上げた。両館では、博物館は資料を収集・保管・展示するといった“モノ”を対象とした機能だけでなく、来館する“ヒト”のための機能を有しているという認識のもと、博物館の社会的役割が重視され、障がい者を対象にしたプログラムが長年提供されており、認知症高齢者への事業もその延長線上にある。両館で採用されている方法は、対象者の経歴や嗜好に合わせた懐かしい“モノ”を、五感に訴えるのに効果的な野外博物館を活かした包括的環境の中で用いることにより、認知症当事者が体験した過去の思い出を想起し、その思い出を語り、他者と共有するよう働きかけるといった、いわゆる“回想法”であり、1時間半～2時間程度のプログラムとして導入されている。両館ともに18世紀初頭から20世紀後半頃までの主要な時代の様々な風景や建物・家屋が忠実に再現されているが、認知症高齢者への教育事業では、高齢者の自伝的記憶が一般的に10～20代の頃に集中する傾向（*remembrance bump*）に鑑み、該当する年代の風景を再現した屋外の敷地と屋内の家屋にある様々な資料（当時の日用品や家具・電化製品等）が主に活用されている。両館では、学校教育及び成人教育の専門家が、事業開発者として認知症ケアや自伝的記憶について近隣の大学で学んだ後に、関係者と連携し、最新の研究蓄積を本事業の職員研修に反映させている。

以上に並行して、デンマークの場合、博物館側が看護師や看護師候補生を館内に引き、博物館の環境を活かした認知症当事者への学習支援のあり方に関する研修の機会を提供し、指導にあたっている。本プログラムの成果として、多くの参加者には短時間であっても顕著な変容が生じており、“その人らしさ”（*personhood*）の回復・維持につながること等が指摘されている。

###### b. 米国の美術館における事例

米国ニューヨーク市の近代美術館（*Museum of Modern Art*）は、精神的・身体的症状により特別な学習ニーズのある来館者に対し、従前から様々なプログラムを考案並びに提供してきた。2006年以降、認知症が疑われる来館者の増加に伴い、同館は認知症高齢者及び介護者を対象にしたプログラム（“*Meet Me*”）を導入し、現在までに全米だけでなく世界各地の同種事業に関心のある同業者を牽引する存在となっており、我が国にも影響を及ぼしている。本プログラムは、近隣の各種高齢者施設から派遣された認知症高齢者及び介護者のグループもしくは個人が、効果的なプログラム提供のために特別に訓練されたエジュケーター（*Educator*）と呼ばれる職員の導きにより、館内の展示作品を鑑賞・評価し合う中で、クリエイティブな思考を発展させながら他者と交流することを目指すものが一般的であり、所要時間は1時間～1時間半程度となっている。

本プログラムの成果として、同館が2008年に認知症高齢者及び同行する家族に対して実施した聞き取り調査によれば、認知症当事者には、短時間であっても、社交性の向上、感情の積極的表

出、認知機能の改善、自尊心の高まり等が生じ、同伴した介護者（家族）には、認知症当事者の人間性への理解、認知症当事者との関係性、認知症に対する認識に向上がみられている。

## ② 図書館の事例

図書館は、様々な年代を対象とした豊富な資料を所有しており、特に文字を介して人間の知的活動に刺激を与える点や、静寂な空間を重視する点にその特徴の一端がある。また、図書館資料は、人間が高度に発達した脳を駆使する上で欠かせない識字能力と密接に関わりを持つものであるため、その点からも認知症高齢者に多方面から貢献しうる潜在性を秘めている。

現地調査で取り上げた米国イリノイ州Elginにある公立図書館地区（Gail Borden Public Library District）は、従前より一般の利用者向けのサービスに加え、障がい者を含む特定の対象者に向けた個別の各種プログラムを考案並びに提供してきた。認知症高齢者への教育事業が同図書館地区により実施される契機となったのは、2007年の国際図書館連盟（International Federation of Library Associations and Institutions）による「認知症者への図書館サービスのガイドライン（Guidelines for Library Services to Persons with Dementia）」の発行である。同図書館関係者は、このガイドラインを執筆したデンマークの関係者にも相談しながら、図書館資料を活用したアウトリーチ事業として介護施設等で実施する認知症高齢者を主たる対象にしたプログラム「民話と旅行（“Tales & Travel”）」を開発した。1回のセッションは1時間程度であり、図書館職員と登録ボランティア数名が、館内の各種所蔵資料や（本事業用に）大きな文字で印字されたプリント、先行となる国の各種民芸品、音楽等を予め用意し、同地区にある複数の介護施設に出向いて実施している。

本プログラムでは、介護施設内の集合場所で、図書館職員らの導きにより、地図や地球儀等を用いて先行となる国が参加者に示された後、各種の統計に基づく興味深い事実や民話等が紹介されるが、この際に音楽や民芸品等を交えた説明が加えられることもある。参加者はそれらを声に出して読んだり、質問したり、自身の過去の経歴をもとに発言したりしながら図書館職員らと交流する。また、自宅等でも同様のプログラムを行えるよう、各種資料が国別にスーツケースに詰められたものを図書館内で貸し出すサービスも提供されている。職員研修は同図書館独自のものが実施されているが、職員の中には自主的に近隣の大学で老年学等を学び、知識を得る場合もある。また近年は、当該事業のため、認知症ケアに専門的知識を持つ職員も採用されている。

このプログラムの特徴として、認知症の各種症状を踏まえ、児童書等のイラストが多く文字数の少ない書籍を含む各種所蔵資料が、図書館職員の専門的見地から慎重に吟味された上で、効果的に提示・活用されていることが指摘できる。また、同プログラムの利点には、過去のみにとらわれない想像的な学習、住み慣れた地域との関係性の維持、（プログラムの広報による）一般市民への意識啓発等が挙げられる。本プログラムの成果に関して、第三者機関が行った調査によれば、参加した認知症高齢者には、認知機能や社交性、介護者との関係性において肯定的変容がもたらされ、介護者には、認知症に対する認識や当事者の人間性への理解に向上がみられたという。

## ③ “認知症村”（Dementia Village）の事例

オランダを先駆者として近年世界各地で建設の進む“認知症村”は、安全に管理された屋内外の敷地内で、認知症高齢者が人間らしく尊厳をもって暮らすために、当事者の行動に一定の自由を認め、彼らが主体性を発揮できるよう、生活全般に配慮の行き届いた介護付きの認知症高齢者専用施設である。とりわけ屋外スペースでの移動の自由が与えられていることは、認知症当事者が自己の意思によって行動できる範囲を格段に広げるとともに、日光や外気に触れ、一般市民と交流するといったより人間らしい行動をとることを容易にする。このように“認知症村”では、認知症当事者が可能な限り以前のような日常を送ることができるよう配慮することにより、彼らは（たとえ重症化しても）コミュニティへの帰属意識を維持し、自らの生活を意味のあるものとしてとらえ、自尊心を保ちながら人間らしく最期まで過ごすことができると考えられている。

“認知症村”の創設・運営には多様な専門家関わっているが、創設者の専門領域により焦点となる内容が若干異なり、それぞれの地域の実情を踏まえた独自の試みが展開されている。本研究では、2009年に創設され、世界各地から参照されているオランダの事例（アムステルダム郊外にあるDe Hogeweyk）と、2019年7月に創設されたカナダの事例（ブリティッシュコロンビア州ラングリーにあるThe Village）を取り上げ、認知症高齢者への学習支援のあり方を中心に考察した。

“認知症村”における学習活動として、オランダの施設では、軽い運動、音楽鑑賞、絵画制作、創造的な活動、料理等、30～40程度のクラブ活動が入居者に用意されている。入居者は週に1つはこうした活動に無料で参加できるため、多くの入居者が1つ以上の活動に関わっている。当該活動は、専門の職員により効率的に運営され、登録ボランティアによっても支援されている。また入居者は、敷地内に設置された（一般市民も利用可能な）劇場の様々な催しにも参加が可能である。こうした各種の活動は、当事者にとって選択と意思決定の機会となり、社会的交流によるウェルビーイングの向上にもつながるものとして重視されている。他方、カナダの施設では、安全に管理された環境のもと、入居者が可能な限り自立した生活を維持し、かつての日常と同じように目的意識を持って自らの意思で自由に行動し、より豊かに生活できるようなコミュニティの創造が目指されている。また、こうした自由は、入居者だけでなく職員にも同等に保障され、いかに入居者の生活を豊かで意義深いものにし、彼らのニーズに応じていくかを職員自身も自由な発想で考え、目的意識を持って職務に従事するよう促されている。さらに同施設では、入居者と職員だけでなく、家族や地域の人々を結びつけることにより、コミュニティの中に意味のある居

場所を見出すことにも重きが置かれている。そのため、同施設の入口付近には、“オークウッド・コミュニティ・センター (The Oakwood Community Centre)” と呼ばれる社会活動の中核となるスペースが設けられており、入居者の意思による創作活動等、自由な活動が行われる他、夜間は音楽等の公演も実施されている。こうして入居者は、たとえ認知症が進行しても、施設の敷地内にあるコミュニティを保持しながら日常生活に意味を見出すことができるよう配慮されている。

“認知症村”の職員研修は、多様な職種向けのものがあり、対象により内容は異なるが、概ね脳の変化と各種の症状、症状に応じた適切な対応のあり方、当事者の全体的理解等が含まれる。“認知症村”は非常に高コストな運営となるため、様々な見解が存在するが、入居者の変容には肯定的評価が多くみられる。例えばDe Hogeweykでは、入居当初は不安に襲われたという当事者が、徐々に自尊心を回復し、生活上の活力を得る中で、周辺症状を消失させていった事例もある。

#### ④ 成人教育施設の事例

英国イングランド北部ブラッドフォードにあるブラッドフォード・カレッジ(Bradford College)は、“認知症にやさしい”カレッジとして、同地区のアルツハイマー病協会と連携した取組で高い評価を得ている。同カレッジは、認知症当事者を社会に包摂するため、医療従事者や地域の各種団体と連携して認知症の受講者を積極的に受け入れる他、職員への対応力向上研修、一般市民向けの認知症に関する意識啓発と知識普及、“認知症にやさしい”教育環境整備等の事業に注力してきた。認知症に関する講座は無料で提供されており、修了者には国家資格が授与されている。

以上の現地調査により、①諸外国の先進的な地域では、生涯学習関連施設において、認知症高齢者を対象に、それぞれの施設の特長や地域資源を活かした教育事業が提供されていること、②症状が進行した高齢者に対しても、アウトリーチ事業として当該施設の職員やボランティアが介護施設に出向く形態がとられたり、認知症の人が快適に過ごす安全な環境が整備されたりする中で、多様な学習支援が行われていること、③認知症当事者への学習機会を意味あるものとするため、当該事業を担当する職員やボランティアには、多くの場合医療関係者等との連携により、認知症の人への対応力向上を目的とした研修が実施されていること、④こうした学習機会は、当事者に意思決定の自由、過去と現在のつながり、一般市民との交流等をもたらしており、それらが当事者の社交性向上、人間性の発揮、地域への帰属感の醸成等を促していることが判明した。

#### (3) その他

本研究を遂行する中で得られた新たな知見として、諸外国の認知症高齢者に対する学習支援の前提として、教育関係者が医学・看護学等の学問領域から積極的に学ぶだけでなく、自らも専門的知識を異分野の関係者に提供するといった対等な関係性が存在していることが挙げられる。例えばデンマークでは、教育関係者が医療・介護関係者からケアのあり方を学ぶだけでなく、彼らを博物館に招き、包括的環境を活かした学習支援について指導していた。双方の関係性は厳密には個々の事例によって異なるが、いずれも教育関係者がその専門的見地から自信を持って当該事業に臨む姿勢があったことは共通している。これには、本研究で取り上げた施設の多くが、従前より障がい者へのきめ細かなプログラムを考案・提供してきたことも影響していると思われる。

本研究により得られた成果に関する国内外における位置づけとインパクトとしては、次の点が指摘できる。まず高齢化の進行する諸外国では、認知症高齢者の特徴を踏まえ、細部にまで配慮の行き届いた教育事業が一部の熱心な関係者により実施され、その検証をもとにさらに充実した内容が模索される傾向にあるものの、国家全体としては我が国ほど認知症高齢者をめぐる問題は深刻な状況にはない。したがって、本研究成果の一部を2020年3月に海外で発表した際には、非常に最新の話題であり、今後求められる研究テーマであるとの評価を受けた。他方、我が国では、認知症高齢者への学習支援に対する教育的観点からの考察は萌芽状態にあるため、同分野の学会ではやや驚きとともに受け止められたが、現実社会で既に多くの問題が表面化しているため、研究の必要性については理解を得られた。また実践面では、諸外国の事例にみられたような既存の社会資本としての生涯学習に関連した施設の再吟味とその利活用、ボランティアの育成と活用、職員の対応力向上、包括的環境の整備等は我が国でも適用できると考えられる。例えば、我が国で図書館のプログラムといえど読み聞かせが一般的に行われ、認知症高齢者を対象に実施される場合もあるが、それに限らず、本研究で取り上げた米国の事例は、図書館が当事者の潜在能力を發揮させる資料を豊富に内包していることを示唆している。国の認知症施策との関連では、2019年に発表された認知症施策推進大綱において「学びを通じた地域社会への参画モデルの提示」が目標の一つに掲げられ、地域にある様々な学習の場が「通いの場」と表現される等、学習を通じて認知症当事者を社会に包摂する方向性が提起されているが、その内実を追究する際に本研究成果も活かせると考えられる。

今後の展望としては、地域における多様な物的・人的資源を踏まえながらも、こうした活動に関心を示さない認知症高齢者も含め、社会全体で認知症との共生に向けた環境の醸成を検討する必要性が指摘できる。これには多分野からの貢献が考えられるが、教育関係者には、第1に「認知症の人にとっての学習」を可能な限り明確に定義した上で、生涯発達の観点から当事者の変容を観察する際の指標を確立し、実践に活かせるよう提示していく姿勢が求められる。第2に、より質的に充実した学習機会の提供に向け、認知症高齢者並びに関わる全ての人々の学習を、現時点の人間関係のみでなく、過去からの経緯も踏まえた生涯発達の観点から総合的且つ重層的にとらえ、より長期的な視座で支援・評価する手法の開発等、専門的見地からの貢献が期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 7件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 Naoko Suzuki	4. 巻 4(2)
2. 論文標題 Exploring the Potential of Educational Institutions to Create Dementia-Friendly Community Movements in Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 PUPIL: International Journal of Teaching, Education and Learning	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Naoko Suzuki	4. 巻 1
2. 論文標題 Advantages and Limitations of Older-adult Volunteer Facilitators Conducting a Well-being Course in the Provision of a University's Open Studies in Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The European Conference on Aging & Gerontology 2019, Official Conference Proceedings	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木 尚子	4. 巻 29
2. 論文標題 認知症高齢者への学習機会創出の意義 好事例に関する教育学的観点からの調査の概況より	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 徳島大学人と地域共創センター紀要	6. 最初と最後の頁 45-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Naoko Suzuki	4. 巻 1
2. 論文標題 Potential for Enhancing Older Adults' Well-being in Libraries: Some Experiences in Japanese Public Libraries through their Dementia-friendly Projects.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The Contribution of Education and Learning for Older Adults' Well-being: Proceedings of the 9th Conference of the ESREA Network "Research on Education and Learning of Older Adults"	6. 最初と最後の頁 68-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木 尚子	4. 巻 28
2. 論文標題 米国の図書館による認知症高齢者への教育事業の特徴と課題 イリノイ州の公共図書館地区によるアウトリーチプログラムの考察と我が国への示唆	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 徳島大学大学開放実践センター紀要	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木 尚子	4. 巻 27
2. 論文標題 北欧の野外博物館における認知症高齢者と介護者を対象とした回想法事業の特徴 生涯学習の観点から見た我が国への示唆	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 徳島大学大学開放実践センター紀要	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木 尚子	4. 巻 26
2. 論文標題 認知症への教育的アプローチの可能性に関する試論的考察 先行研究の資料分析調査をもとに	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 徳島大学大学開放実践センター紀要	6. 最初と最後の頁 1 - 18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件(うち招待講演 0件/うち国際学会 5件)

1. 発表者名 Naoko Suzuki
2. 発表標題 Current Movements toward Dementia-Friendly Communities in Japan: Contributions by Educational Institutions
3. 学会等名 The 2nd International Conference on Teaching, Education & Learning (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Naoko Suzuki
2. 発表標題 Advantages and Limitations of Older-adult Volunteers in Conducting a Well-being Course as Facilitators in the Provision of a University's Open Studies in Japan
3. 学会等名 The European Conference on Aging & Gerontology 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木 尚子
2. 発表標題 認知症に優しい"村"づくりにみる学習機会のあり方と潜在的役割
3. 学会等名 日本社会教育学会第66回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木 尚子
2. 発表標題 米国の図書館・博物館による認知症高齢者への教育事業の特徴と課題 生涯学習関連施設が関わることの意義に注目して
3. 学会等名 日本比較教育学会第55回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Naoko Suzuki
2. 発表標題 Potential for Enhancing Older Adults' Well-being in Libraries: Some Experiences in Japanese Public Libraries through their Dementia-friendly Projects.
3. 学会等名 The 9th Conference of the ESREA Research Network on Education and Learning of Older Adults (ELOA) (国際学会)
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 鈴木 尚子
2. 発表標題 認知症者に優しい生涯学習関連施設のあり方に関する一考察 諸外国の実践事例にみる図書館の優位性
3. 学会等名 日本社会教育学会第65回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Naoko Suzuki
2. 発表標題 Potentials of Fostering Reminiscence Programs in Educational Settings of Local Communities in Japan: Some Positive Effects and Current Limitations.
3. 学会等名 2018 WEI Boston Conference on Education, Teaching and Learning (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木 尚子
2. 発表標題 博物館の教育事業を通じた認知症疑いの高齢者へのアプローチと課題 国内外の事例にもとづく生涯学習の観点からの比較考察
3. 学会等名 日本比較教育学会第54回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Naoko Suzuki
2. 発表標題 Creating Networks Among Ex-Students of Lifelong Learning Courses and Supporting Their Voluntary Activities in Japan: A Way of Inspiring the Older Generation?
3. 学会等名 Aging and Society: The Seventh Interdisciplinary Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鈴木 尚子
2. 発表標題 野外歴史博物館の活用による認知症高齢者の記憶想起を促す試み デンマークとスウェーデンにおける博物館の教育事業より
3. 学会等名 日本社会教育学会第64回研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鈴木 尚子
2. 発表標題 認知症に優しい地域づくりに向けた生涯学習関連施設の果たしうる役割 英国・ブラッドフォードカレッジを事例として
3. 学会等名 日本比較教育学会第53回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鈴木 尚子
2. 発表標題 諸外国における認知症高齢者への学習支援に関する先行研究の検討
3. 学会等名 日本社会教育学会第63回研究大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<ul style="list-style-type: none"> <li>・2019年10～11月 徳島大学公開講座「認知症と学習の可能性 生涯学習関連施設を活かしたアプローチ」の実施（全3回）</li> <li>・2018年11月 徳島大学公開講座「語り合うキオク 回想法から見えてくる私」の実施（全1回 半日講座）</li> <li>・2018年11月 徳島大学公開講座「生涯学習としての回想法 豊かな地域づくりを目指す初心者に向けて」の実施（全4回）</li> <li>・2017年11月～2018年1月 徳島大学公開講座「見つめ直す生涯学習 諸外国の事例から」の実施（全5回）</li> </ul>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----